調査・研究ノート

農林水産物輸入の動向

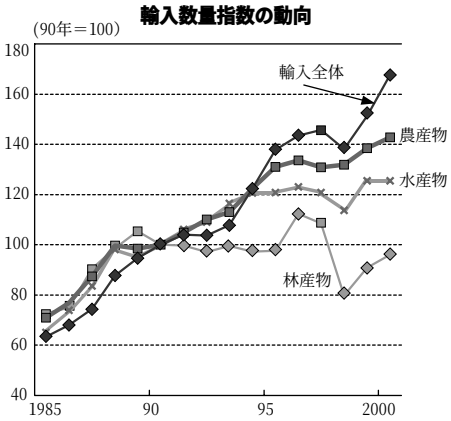
―アジア諸国からの輸入を中心に―

近年、アジア地域からの農林水産物輸入が増大しているが、本稿では、その実態を貿易統計で確認してみたい。

一．概況

九九年の農林水産物輸入額は六〇八億ドル（七兆五八〇億円）であり、輸入全体の一九・六％を占めており、その内訳は、農産物三五八億ドル、水産物一五三億ドル、林産物九八億ドルである。農林水産物の輸入は八〇年代後半から九〇年代前半にかけて円高を背景に急増し、九九年の輸入額は八五年の二・三倍（ドルベース）になっている。ただし、円ベースでは一・一倍であり、また九六年をピークに九七年以降は、円安への転換、経済不況、農林水産物価格の低下等により頭打ちの状況にある。

価格変動要因を取り除いた数量指数で輸入量の伸びをみると、九九年の輸入量は八五年に対して農産物二・〇倍、水産物一・九倍、林産物一・四倍であり、近年は林産物輸入は停滞している。また、農林水産物の輸入が増加したとはいえ、農林水産物の輸入量の伸びは輸入量全体の伸びより低い。これは、日本の製造業がアジア地域に進出し機械類を中心に製品輸入が増大しているためである。



資料：農水省「農林水産物輸出入の数量・価格指数」他

二．地域別動向

アジア地域からの輸入が増大したものの、国別では依然米国からの輸入額が最も多く（九九年一六八億ドル）、農林水産物輸入全体の二七・六％を占めている。しかし、八〇年には三五・二％を占めていたのであり、米国のシェアは低下しており、特に九七年以降は丸太、穀物、牛肉を中心に輸入額が急減している。

その一方で輸入が急増しているのが中国である。九九年の輸入額は六五億ドルで八〇年の七倍、九〇年の二・三倍になっており、農林水産物輸入全体に占める割合は三・二％（八〇年）から一〇・七％（九九年）に増大している。

ASEAN諸国からの輸入額は九五年頃までは増大したが、九七年の通貨危機以降は急減しており、ASEAN四カ国からの輸入額の割合は一四・八％（九五年）から一三・一％（九九年）に低下している。韓国からの輸入は多少の変動はあるものの増加基調で推移しているが、台湾は九七年以降輸入額が激減した。カナダからの輸入は製材品を中心に堅調に推移しているが、豪州からの輸入は穀物価格の低下、牛肉輸入の減少により伸び悩んでいる。

このように、近年の農林水産物輸入は米国、豪州、ASEANのシェアが低下する一方で中国のシェアが急増し、またEU、インド、ベトナム、南米等のシェアが増加している。日本の農林水産物輸入先は多様化しており、特に、ウルグアイラウンド合意は米国からの輸入を増加させたわけではないことが注目される。

三．アジア諸国からの輸入動向

次に、アジア地域からの輸入の現状を国別に見てみる。

(一)中国

中国は現在ではカナダ、豪州を抜いて米国に次ぐ第二の農林水産物輸入相手国になっている。金額的に大きいのは、加工鰻、鶏肉、製材、一時貯蔵野菜、家禽肉調製品、魚のフィレ、たけのこ缶詰、羽毛、えび、か

に調製品、しいたけであり、上位二品目（加工鰻、鶏肉）が輸入額全体に占める割合は一六％に過ぎず、輸入品目は多様である。中国からの総輸入額に占める農林水産物の割合は一五％であり、繊維（三一％）、機械類（二四％）よりは少ない。

㈡韓国・台湾

韓国からの輸入は着実に伸びてきたが、伸び率は高くはない。最大の輸入品目は豚肉であり、台湾からの輸入減少を補う形で増加している。第二位はかつお・まぐろであり、上位二品目で三二％を占めている。全体としては水産物の占める割合が高く、農産物はまつたけ、薬用人参、小麦粉調製品、くりなどに限られている。

台湾からの輸入は九五年まで高い伸びを示していたが、九七年に口蹄疫が発生して豚肉の輸入が禁止となったため輸入額が激減し、九九年の輸入額は九五年のほぼ三分の一となっている。輸入品目には偏りがあり、九五年当時は豚肉が四八％を占めており、これにかつお・まぐろ、鰻を加えた上位三品目で七四％に達していた。九九年でもかつお・まぐろが四四％を占めている。

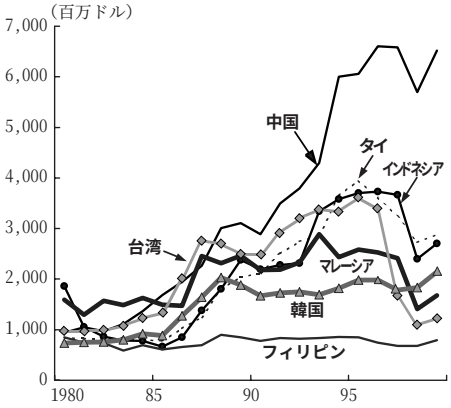
㈢タイ

タイからの農林水産物輸入は九五年まで急増し、九五年の輸入額は八五年に比べ五倍になっている。しかし、通貨危機以降は減少し、九九年の輸入額は九五年の七割になっている。輸入額が大きいのは天然ゴム、鶏肉、えび、えび調製品、いか、ペットフード、鶏肉調製品であり、上位五品目で四六％を占めている。輸入品目は多様であり、近年は調製品が増加しているものの、中国との競合もあるためかつての勢いはなくなっている。

㈣インドネシア

インドネシアからの輸入は、八〇年代前半に丸太輸出禁止措置をとったため一時急減したが、その後、合板、製材品を中心に九〇年代中頃まで順調に増大した。しかし、通貨危機以降減少し、九九年の輸入額は九五年の七割の水準になっている。輸出額の上位品目は合板、えび、製材、かつお・まぐろ、コーヒー生豆であり、合板と製材品で四六％を占めており、これにえびを加えた上位三品目で六七％を占め少数の品目に偏っているが、近年では調製品の輸入が増加している。

アジア諸国からの農林水産物輸入



資料：JETRO「アグロトレードハンドブック」

㈤その他

マレーシアからの輸入も、経済危機以降減少している。九九年の輸入額のうち合板、丸太、製材の三品目（主にサバ、サラワク州産）で六七％を占めているが、近年は丸太輸入が減少し合板輸入が増加している。そのほか輸入額が大きい品目は、パーム油、えび、ペッパー、かつお・まぐろ、天然ゴムである。

フィリピンからの輸入はほぼ横ばいで推移しているが、輸入品目は変化している。八〇年当時は粗糖、丸太の上位二品目で四八％を占めていたが、その後この二品目の輸入は激減し、九九年ではバナナ、えび、かつお・まぐろが上位を占め、バナナだけで四八％を占めている。

インド、ベトナムからの輸入は増加しているが、インドからの農林水産物輸入の六二％、ベトナムでは四六％が、えびの輸入である。

㈥まとめ

このように、アジア地域からの農林水産物輸入が増加しているといっても、九〇年代後半の通貨危機以降は「中国の一人勝ち」と言ってもよいような状況であり、また輸入品目や増減動向は国ごとに異なっている。今後、中国がWTOに加盟し、アジア地域の自由貿易協定の論議がさらに進むことが見込まれ、日本の食料安全保障という観点からもアジア諸国からの農林水産物輸入の動向、構造変化を注視していく必要があろう。

（清水徹朗）